

岩谷 山梔子（いわや・くちなし）

1、プロフィール

俳人。はじめ河東碧梧桐、のち大須賀乙字に親しみ、俳誌「懸葵」の編集にかかわるなど中央俳壇で活躍した。

<生没>

1883(明治 16)年1月 30 日 ~ 1944(昭和 19)年1月4日

<代表作>

『山梔子第一句集』

<青森との関わり>

青森町米町(現青森市)生まれ。

2、作家解説

本名は健治。明治 35 年青森の不来会に参加。36 年「ホトギス」に投句し始め、以後新聞「日本」に投句、河東碧梧桐の選をうける。

40 年碧梧桐が『三千里』の行脚の途次、野辺地に滞在すると、青森から日参。この頃の日本派の俳句集『続春夏秋冬』『日本俳句鈔』にも多数の句が入集、頭角を現わす。『三千里』行脚の北海道より帰途の碧梧桐に随行して津軽半島および弘前・板留の各地を巡り、親密の度を深める。

43 年、大谷句仏が樺太巡錫の途次、樺太まで随行し、やがて句仏を頼って上洛し、京都に住む。句仏の俳誌「懸葵」の編集に従う一方、東本願寺の内事局に勤めたが、怠慢により職を免ぜられる。

大正 10 年、「懸葵」の中心大須賀乙字の俳論を『乙字俳論集』として出版し、昭和 7 年県出身の中村泰山の句集『泰山俳句集』と、『浪化俳句集』を編集出版。昭和 10 年『本願寺歴代法主句纂』の編集は、広範な資料渉獵において自信を示したものであった。これら俳書の編集は彼の実績とされる。

山梔子の俳句は、碧梧桐派をもって始まったが、同門が新傾向問題で分裂した後は、句仏、乙字に親しんだ。生涯、定型句で通したのもこの経歴にかかわっている。

句風は巧緻洗練と称される。

3、資料紹介

○『山梔子第一句集』

図書

1924(大正 13)年 12 月 25 日

170mm×105mm

発行者桜井安蔵により、京都市紫苑社から発行された。

明治 36 年から 45 年までの 1117 句、その他旅中吟、龍飛行 38 句、十和田湖めぐり 19 句、海馬島まで 125 句、総計 1299 句収載されている。序文の一つに碧梧桐「昔の想ひ出」が見える。

○囀や松杉ふかき山つゞき

書画(短冊)

362mm×60mm

詞書きに「外ヶ浜義経寺」とあり。『山梔子第一句集』所収。明治 37 年 5 月 23 日の新聞「日本」初出。